



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

在外教育施設における体育科教育と体力向上

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬淵, 奈央人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173640

在外教育施設における体育科教育と体力向上

前大連日本人学校教諭

東京都八王子市立高嶺小学校主幹教諭 馬淵 奈央人

キーワード：在外教育施設、体育科教育、体力向上

学校名：大連日本人学校

URL: <http://www.japanda.cn/>

1. はじめに

派遣先であった、大連日本人学校での初年度の校舎では、校庭が狭く、体を自由に動かせることが少ない環境であった。PM2.5の影響を受けて校外活動に制限がある日が多かった。そして、日本全国から教師と児童が集まり、それぞれの良さを活かした授業づくりを行いたいと思った。さらに、国際家庭の児童が多かったため、教育環境に興味をもった。そこで、大連日本人学校の児童の実態に合わせた運動の取り組み方や授業の組み立て、家庭環境などについて興味をもち、このテーマを設定した。

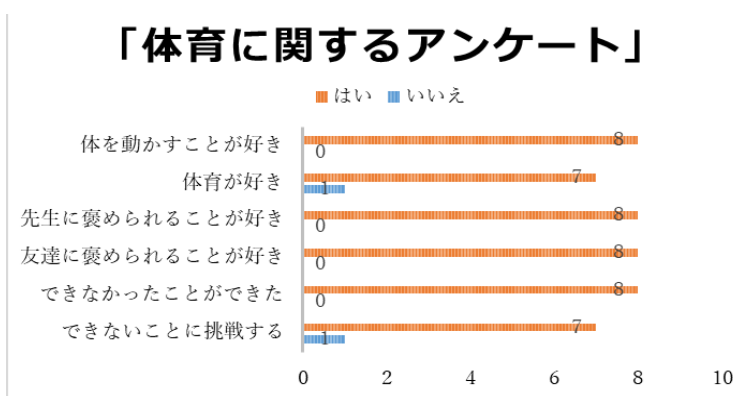
2. 調査・研究の結果

(1) 児童の実態 (令和2年度 小学部5年担任)

① アンケート調査

調査方法 (質問紙調査) 調査対象 (第5学年1組8名) 実施時期 (令和2年12月18日 (金) 実施)

体育に関わる内容を考え、児童の実態を把握するためにアンケートを実施した。アンケートの結果から、学級全体として、「体を動かすことが好き」、「体育が好き」と答える児童が多く、運動に対して肯定的に捉えている児童が多いことが分かる。また、授業の中で「教師や友達から褒められることが好き」と答える児童が多く、担任や友達に褒められたという気持ちも強いことが分かる。



このことから、児童同士が必要に応じて、互いに教え合い、褒め合うようになれば、運動の楽しさに気付き、必要感をもって運動することにつながると考えた。また、教師が児童の見つけ出したポイントを全体に広め、共有することで、個々を認め、児童の自己肯定感を高めることにもつながり、技能の向上にもつながると考える。

以上のことから、学級の実態として、必要感をもたせる課題を提示し、場の設定を工夫することで、積極的に運動に取り組み、体力向上につながると考えた。

② 児童の環境調査

調査方法 (個別面談) 調査対象 (第5学年1組8名) 実施時期 (令和2年7月3日 (金) 実施)

- ・運動系の習い事… 8/8人中
- ・学習系の習い事… 7/8人中

・文化系の習い事… 1/8人中

※1人の児童は、日曜日から土曜日までの間に、複数の習い事があり、休みの日は1日であった。

調査の実態から、約9割の児童が運動系と学習系の習い事をしていることが分かる。そのため、学校の課題と習い事の時間で、体を動かす時間が制限されていることも分かる。さらに、1週間のうち、6日間習い事をしている児童もいることが分かる。習い事をしている児童の中でも、習い事にかかる時間が大きく異なるため、児童によって、体を動かすことがほとんどできないということが調査の結果から分かる。

(2) 環境について (自然環境・人的環境)

○自然環境

PM2.5の影響で、外活動(校舎外活動)ができない日が多かった。また、霧がかかったように10m先が見えないときがある。そのため、体育の授業や外活動・学校行事ができないことが多い。1年間を通して、3分の1弱の日が外活動できない年もあった。PM2.5の影響により、体を動かす環境が制限された日が多かった。

○人的環境

在外教育施設において、通学は基本的には公寓(アパートメント)ごとにバス通学をしている。また、自主登下校の児童は、自家用車で通学になる。そのため、日本国内の児童と比べると歩く活動が、極端に少なかった。

(3) 在外教育施設(学校)設備の実態

① 講堂(体育館)について

令和元年12月に、校舎の移転があった。移転したことで、旧校舎よりも校庭と講堂(体育館)が広がった。旧校舎は、外活動ができない日は、講堂で活動を行っていた。しかし、旧校舎の講堂は、25人学級で走ることやボール運動を行うことが出来ないほど狭かった。新校舎になり、広さは以前の倍以上の広さになった。(※資料1と資料2を参照)

資料1 (旧校舎)



資料2 (新校舎)



② 校庭について

旧校舎の校庭は、敷地面積が横に広く、運動する場所としては、運動の内容によって制限されるものがあった。新校舎は、敷地面積は旧校舎とは変わらなかったが、日本国内と同じような敷地になったので、運動しやすい条件となった。(※資料3と資料4を参照)



資料3 (旧校舎)



資料4 (新校舎)

3. 実践報告

(1) 指導方法

① 指導方法

指導において一番大切にすることが、「運動量」の確保より、「運動の質」の確保である。学習指導要領で述べられているように、生涯スポーツにつなげるため、運動する時間に制限がある児童にとって、何が一番なのかを考えた結果、児童の必要感を大切に、授業づくりを行うこととした。

② ICT機器の活用

大連日本人学校では、30台以上のiPadを購入し、学級の児童が1人1台iPadを使える環境になった。そこで、授業の中で児童が自由に使えるように指導をした。

iPadでスロー動画撮影…児童の動きをスロー撮影して、すぐに動きを確認する。

- 例) 跳び箱運動の踏み切りや空中姿勢・着手の位置の確認
- マット運動の着手の位置や回転姿勢の確認
- 小型ハードル走の振り上げ足の上げ方や空中姿勢の確認
- 走り幅跳びや走り高跳びの空中姿勢の確認

iPadで動画撮影…児童の動き（全体の動き）を撮影して、振り返る。

- 例) ボール運動において全体の動きや個々の動きの確認
- オフザボールの動きの確認



③ 対話の確立

iPadを活用することで、全体の動きや個々の動きを確認できるようになった。そこで、意図的に児童同士が対話できる場を設定した。ルールを変えたり、作戦タイムを柔軟に取り入れたりすることで、対話が活発になった。対話を通して、動きが良くなったり、意欲的に運動に取り組めたりすることが多くなった。



4. 終わりに

実態を調べることで、在外教育施設での児童の実態や学校施設、家庭環境の様子を詳しく知ることができた。また、自然環境や人的環境での日本国内との違いにも気付くことができた。それによって、体育科授業の組み立て方や実態に合わせた指導方法を練り、他教員と協議をしたり、試行錯誤したりする中で、よりよい授業を行うことができるようになった。さらに、授業の中で児童が意欲的に体育に取り組んだり、休み時間を利用して苦手な運動に取り組んだりする姿が見られた。この経験を生かして、帰国後は日本国内の体育科教育に貢献したい。課題として、自然環境と人的環境は変えられないことが大きな課題であった。PM2.5の影響により、外活動（授業）が全てできなくなることで、体を動かすことが制限されてしまった。指導の観点として、運動量より運動の質とは考えていたが、これほど体を動かすことが制限されると、かなり厳しい状況だと感じた。また、人的環境では通学にはバス通学をする児童が全校の約6割の児童がいるので、交通状況や天気によって左右されやすく、時間に見通しがもてなくなる。その分、授業にも差し支えることが多かった。まずは、課題解決する第一の策として、運動の質を上げることに重きを置いて、指導を重ねていくことが重要だと感じた。